

第7回柿田川シンポジウム『水の動きと生態系から柿田川を考える』 ～ 柿田川生態系研究会 ～

生態系グループ 川口 究

1. はじめに

柿田川は、延長1.2kmの狩野川の支川であり、富士山周辺で降った雨水や雪解け水が地下水になって湧き出してできた湧出量約100万m³/日の湧水河川です。水温は年間を通じて15℃前後、流量も12 m³/s前後とほとんど変化がなく、土砂生産・運搬・堆積作用もほとんどみられないなど、他の河川では例がないような、極めて安定した環境を有しているといえます。

柿田川生態系研究会は、前述のような他では得られない湧水河川「柿田川」についての学術的興味に惹かれた研究者の集まりであり、平成12年に発足して以来、10年間の研究活動を行ってきました。また、研究活動以外にも、年1回の研究報告会（ミニシンポジウム）、地元の小学生を対象に屋内外での実験、観察、質疑応答をすることで柿田川の不思議を体験し、科学への興味、身近な自然環境への関心等を一層深めてもらうことを目的とした課外授業（サマーサイエンススクール：図1）を実施している他、地域住民や行政関係者等との自由闊達な意見交換を伺う場として柿田川シンポジウムを毎年開催しています。



図1.サマーサイエンススクールの様子

2. 第7回柿田川シンポジウム

2010年10月23日（土）に第7回柿田川シンポジウム『水の動きと生態系から柿田川を考える』が三島市の三島市民生涯学習センター講義室において開催されました。柿田川生態系研究会のメンバーら5人が発表し、柿田川の有するユニークな特徴などについて意見交換が行われました。発表テーマは「湖沼・河川生態系の二酸化炭素が語ること（東北大学大学院・占部教授）」、「河川の流水環境と生態系（リバーフロント整備センター・内藤主席研究員）」、「湧水と河川における貝形昆虫類の生態（静岡大学・塚越教授、

須田氏）」、「超安定水温下における川虫の生物季節（大阪府立大学大学院・谷田教授、元神奈川県環境科学センター・野崎氏）」であり、生態学の専門家である占部教授からは、地球温暖化の原因物質である二酸化炭素をキーワードとして、物理化学環境と地形から推測される河川、湖沼の成り立ちとその変化によって生態系や人間社会にどのような波及効果があるのかについて話題提供が行われました。また、内藤主席研究員からは、河川の構造に着目し、柿田川を一般的な流水環境を有する河川と比較することにより、その生態系の有するユニークな特徴が紹介されました。一方、進化及び生物多様性の専門家である塚越教授、須田氏からは、砂の間隙に生息する微小な節足動物であるオストラコーダについて、その生活史と湧水との関わり方が紹介されました。さらに、水生昆虫の専門家である谷田教授、野崎氏からは、分類学的研究により確認された柿田川固有のトビケラに関する報告と水温が一定の柿田川において、トビケラがどのように羽化期（生物季節）を決定しているのかについて話題提供が行われました。

いずれの発表も柿田川が有する特徴的な環境及び生態系について、多様な側面から専門的かつ理解しやすい話題を提供するものであり、当日参加した柿田川の環境を保全してこられた地元の方々、柿田川の水を利用されている住民の方々、行政関係者、研究者などの参加者からは活発な質問が寄せられました（図2）。



図2.柿田川シンポジウム会場の様子

3. おわりに

柿田川生態系研究会では、平成23年度に第8回柿田川シンポジウムを開催予定です。今年もたくさんの方々のご参加をお待ちしております。（詳細については、決定次第リバーフロント整備センターホームページ<http://www.rfc.or.jp/>内でご案内します。）